

# C—1 備後の織と染(第1報)

## —備後緋の特長について—

広島大教育 久枝トヨ子

1. 備後地方は、久留米、伊予などと共に緋の三大産地であるが、現在、全国生産量の75%を占めている。この緋は嘉永6年に創られ、文久年間に生産開始されたものであるが久留米緋におくれること60年、伊予緋におくれること55年といわれている。そこで、当然、他の地域の影響を多大にうけていると思われるが、備後緋の発展の歴史とその緋模様の特長を他の産地のものと比較追求することをこころみた。

2. 実物調査、文献諸資料、写真図版を参考資料とし、更に明治生まれの緋生産者に面接調査をくり返し、研究を行なった。

3. 備後緋の模様は土に立脚し野良作業着用にもむけられたために小柄(巾70~20)中柄(巾10~14)の幾何模様が多いが、ふとん用としての大柄(巾1~2)も明治37年頃から大正初期にかけて作られていた。家内工業生産で産地内競争が盛んだったので、柄数も多く、商品選択時代にうまく適合し消費量が他の産地を圧してのびていった。

次に、手ぐりに変わって大正初期にたてぐり機、続いてよこぐり機の導入。又、昭和10年頃から従来の足踏機に変わって機械機が導入されるといわれる備後の「つなぎ柄」が、井桁、あらね、角、ぼたん柄などに換わって新鮮さを加えた。現在の備後緋は木綿緋からウール緋へ生産転換がなされつつあるが、同時に「ウール柄」といわれるつばめ、水、こうし、矢緋がよく用いられている。